

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二 演舞場B二  
電話(五四二)五四七一

清元協会

港区西麻布一の二の三の四〇五  
電話(四〇五)八〇〇五番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館  
電話(五七二)〇二一六番

新内協会

新宿区大久保二の二三の二  
電話(二〇〇)四六五三番

常磐津協会

目黒区上目黒四の三十三の十四  
電話(七一五)一五一八番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四  
電話(五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三  
電話(五八五)九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

平成二年三月三日(土)

朝日生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

90都民芸術フェスティバル

第二十回 邦楽演奏会

邦楽名曲選



'90都民芸術フェスティバル参加公演（平成元年度東京都助成公演）一覧

分野	種目	演 目	期 日・会 場	入 場 料 金	問 合 せ 先
音	オ ペ ラ	ブッチーニ「トスカ」 (原語上演) (藤原歌劇団)	1/29・1/31・2/3・2/5 東京文化会館大ホール	12,000～1,500円	(財)日本オペラ振興会 (224)9633
		ブッチーニ「お蝶夫人」 (原語上演) (二期会オペラ振興会)	2/24・2/25・2/26 東京文化会館大ホール	10,000～1,500円	(財)二期会オペラ振興会 (370)6441
		青島広志「黄金の国」 (東京室内歌劇場)	3/9・3/10 浅草公会堂	4,000円	東京室内歌劇場 (350)5926
楽	室 内 楽	第 21 回 都民のための コンサート	オーケストラ 1/12～3/20 東京文化会館大ホール	2,800～1,000円	(社)日本演奏連盟 (437)6837
		室内楽 1/28・2/2 東京文化会館小ホール	2,000円		
	ポ ピ ラー	スーパーハーモニー タイム・ファイブ	3/8 日本青年館ホール	2,500円	(社)日本音楽協会 (585)3903
	邦 楽	第 20 回 記念演奏会	3/3 朝日生命ホール	1,500円	邦楽連合会 (542)6564
演	新 劇	コリン・ヒギンズ「ハロルドとモード」 (合同公演)	2/4～2/20 3/2～3/11 紀伊国屋ホール 俳優座劇場	4,120円	新劇団協議会 (341)8151 劇団民藝 044(987)7711
		大谷直人「シシとササの伝説」 (合同公演)	1/17～1/25 1/26 よみうりホール 多摩教育センターホール	定時制高校生貸切	新劇団協議会 (341)8151
劇	児 童 劇	「おぼけのネネム」 宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ ネネムの伝記」より (舞台劇合同公演)	2/20・2/21 2/22・2/23 2/24～2/27 3/2・3/3 前進座劇場 江東区児童会館 朝日生命ホール 豊島公会堂	当日売 2,500円 前売 2,200円 団体 10名以上 2,000円 20名以上 1,800円	日本児童・青少年演劇団協議会 (409)1797
		舞	「眠れる森の美女」	3/6・3/7・3/8 東京文化会館大ホール	8,000～2,000円 中高生無料招待あり
踊	バ レ エ	牧阿佐美バレエ団 「ドン・キホーテ」(全幕)	3/25・3/26・3/27 東京文化会館大ホール	8,000～2,000円	東京バレエ協議会 (725)8000 牧阿佐美バレエ団 (360)8251
		現代舞踊 「V i t a」 「津軽からの宅急便」 「赤い部屋」 「今もむかし隅田川」	1/18・1/19 東京文化会館大ホール	3,000～2,000円 無料招待あり	(社)現代舞踊協会 (400)4544
	日 本 舞 踊	第33回 日本舞踊協会公演	2/13・2/14・2/15 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	(社)日本舞踊協会 (533)6455
古 典 芸 能	能	都 民 能	1/20 国立能楽堂	2,500円	(社)能楽協会 (574)6441
		式 能	2/18 国立能楽堂	6,000円	
	長 巻 芸 能 寄 席 芸 能	第21回 東京都民俗芸能大会	3/3 3/4 中央区立中央会館 町田市民ホール	無 料 招 待	東京都民俗芸能大会実行委員会事務局 (917)6884(宮尾)
		第20回 都 民 寄 席	2/9～3/10 東村山市中央公民館他	無 料 招 待	都民寄席実行委員会事務局 0423(81)5534(大石)

○これらの個々の公演の詳細に関するお問合せは各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたるお問合せは東京都教育庁社会教育部文化課(電話212-5111 内線44-531、44-532)へお願いいたします。

'90 都民芸術フェスティバルに寄せて

東京都知事 鈴木俊一



都民芸術フェスティバルのシーズンがやってまいりました。このフェスティバルは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へをキャッチフレーズとして、東京都が芸術文化団体の公演を助成することによって、都民の皆様が優れた舞台芸術を鑑賞していただくという目的ではじめた催しで、今回で第二十二回を迎えました。

芸術性の高い公演内容、最高の舞台芸術を提供しようという出演者の方々のなみなみなならぬ意欲とこの催しを心待ちにしている都民の皆様の熱い声援に支えられ、東京都の代表的文化行事としてすっかり定着してまいりました。誠に喜ばしい限りです。

私はいま、ふれあいというおいを大切に「マイタウン東京」づくりに全力を注いでおります。なかでも芸術文化は、私たちに豊かな心とゆとりある生活を与えてくれるものとして、大変重要なことと考えており、その振興に力を尽くしてるところであります。都民芸術フェスティバルを他の文化的施策とともに、都民の要望と期待に十分応え得るものとし、また国際的にも誇れる催しとして今後とも一層充実、発展させてまいりたいと考えております。

この催しに、一人でも多くの皆様に参加され、優れた舞台芸術を心ゆくまで鑑賞していただきたいと存じます。

おわりにこのフェスティバルに参加し、東京都の芸術文化の振興にお力添えくださっている邦楽連合会のみなさんすばらしい御活躍を心から御期待申し上げます。

第一部 番 組 (十二時半開演)

一、三曲松 竹 梅

尺 箏	三 弦	三 弦
八 川	米 崎	矢 木
瀬 川	文 崎	富 敬
順 勝	輔 之	美 代
		二 子

二、清元 能 色 相 図 (神田祭)

同	清	清	清	清	淨 瑠璃
同	元	元	元	元	清
同	梅	梅	梅	紫	清
同	惠	美	多	梅	元
同	壽	秋	壽	壽	元

三味線 紫壽文 梅多壽 梅美秋 梅惠壽

同	清	清	清	三
	元	元	元	味
	香	益	梅	線
	葉	代	丸	

三、義太夫 傾城阿波の鳴門—巡礼歌の段—

お	お	お
お	竹	竹
つ	本	本
る	綾	駒
鶴	一	龍
澤		
駒		
登		
久		

三味線

四、萩江節 鐘 の 岬

同	同	唄
萩	萩	萩
江	江	江
お	た	か
と		祥
岸	同	三
辺	萩	味
百	江	線
代	さ	八
	ち	千
		代

五、新内節 明鳥夢泡雪 (明鳥・雪責め)

浄瑠璃 新内 光翁太夫 三味線 新内 勝一朗  
 同 新内 光朝太夫 上調子 新内 勝次朗

六、常磐津 積恋雪 関扉 (関の扉・下)

浄瑠璃 常磐津 文字太夫 三味線 常磐津 文字兵衛  
 同 常磐津 小文字太夫 同 常磐津 八百八  
 同 常磐津 八重太夫 上調子 常磐津 紫弘  
 同 常磐津 和光太夫

七、尺八鹿の遠音

尺八 横山勝也  
 尺八 青木鈴慕

八、長唄 京鹿子娘道成寺 (娘道成寺)

唄 杵屋 佐登代 三味線 藤 綾子  
 同 杵屋 吉与志 同 藤 長十郎  
 同 杵屋 吉与志 同 藤 長由利  
 同 杵屋 佐臣 同 藤 郁子  
 同 杵屋 佐琴 同 藤 文子

囃子

小笛 福原 百之助  
 立鼓 望月 慎一  
 大鼓 望月 太喜雄  
 太鼓 望月 左之助

第二部 番組 (四時半開演)

一、義太夫新版歌祭文——野崎村の段——

久作竹本朝重	お光竹本駒之助	お染竹本越孝	久松竹本越道	母竹本越道
三味線 鶴澤寛八	ツ 鶴澤多美子	同 鶴澤駒治	同 野澤輝雅	同 鶴澤津賀寿

二、三曲松風

箏 中田博之	箏 藤井千代賀	山 山勢司都子	三 山勢松韻	尺八 青山木鈴慕
--------	---------	---------	--------	----------

三、一中節熊野文の段

浄瑠璃 宇治文彩	同 宇治文美子	同 宇治文声	三味線 宇治文蝶	同 宇治文好
----------	---------	--------	----------	--------

四、新内節若木仇名草(蘭蝶)

浄瑠璃 富士松 鶴千代	三味線 新内仲三郎	上調子 新内勝史郎
-------------	-----------	-----------

五、常磐津 忍夜恋曲者(将門)

浄瑠璃 常磐津 清勢太夫 三味線 常磐津 菊助  
同 常磐津 津太夫 同 常磐津 菊志郎  
同 常磐津 清若太夫 上調子 常磐津 絃寿郎

六、尺八鶴の巢籠

尺八山本邦山 尺八北原篁山

七、清元忍逢春雪解(三千歳)

浄瑠璃 清元 美寿太夫 三味線 清元 美治郎  
同 清元 荣志太夫 上調子 清元 勝三郎  
同 清元 志寿雄太夫

八、長唄勸進帳

唄 吉住小三郎 三味線 稀音家 六四郎  
同 吉住小真治 同 稀音家 助三郎  
同 吉住小良次 同 花垣嘉伸  
同 吉住彰規 同 稀音家 新之助  
同 吉住小貴三郎 上調子 稀音家 三郎助

雛子 笛 福原百之助  
小鼓 望月慎一  
立鼓 望月左之助  
大鼓 望月多喜雄

# 曲目解説（演奏順）

（解説 竹内道敬）

## 第一部

### 三曲松 竹 梅

大阪の三橋勾当作曲（手事物）。

前歌では初春の難波の梅とうぐいすを歌い、中歌では君が代を祝って松に鶴、後歌では秋の月にむら竹、虫の音を歌う。順序としては、梅、松、竹になっている。歌の間に手事があり、とくに後の手事はマクラと手事三段という大きなもので、その第一段から「巢籠地」が合わされる。全体に変化に富む大曲で、この「松竹梅」と「根曳の松」「名所土産」は、地歌の許し物制度上最高の「三役」として扱われている。

### 清元 能 色 相 図（神田祭）

三升屋二三治作詞、二世清元齋兵衛作曲。天保十年（一八三九）九月、江戸河原崎座で二世清元延寿太夫の養子二世栄寿太夫のお目見得浄るりとして初演された。

神田明神の祭礼は、江戸時代のはじめ將軍の上覧に供してから、山王祭とともに、御用祭、天下祭と呼ばれて有名であった。毎年大祭を行っていたが、天和ごろから山王祭と交互に行うようになり、大祭のない年は陰祭といった。江戸時代は九月十五日だったが、明治以後五月十五日に変更された。歌詞は支離滅裂だが、いかにも神田の祭礼気分をしのばせる粋な味と、景気のいい節がついているので流行している。

### 義太夫 傾城 阿波の鳴門―巡礼歌の段―

近松半二、八民平七らの合作で明和五年（一七六七）六月、大阪竹本座初演。近松門左衛門の「夕霧阿波の鳴渡」の改作というが、そのおもかげはほとんどない。夕霧伊左衛門の話に、玉木家（実は伊達家）のお家騒動、阿波の十郎兵衛の巷説をとり入れた十段に及ぶ時代物。

しかし、初演以後は第八段の十郎兵衛内、通称「巡礼歌の段」がもつとも名高く、この段だけがくり返し上演されている。芝居でも通称を「どんどろ」といって、やはりこの場面だけが上演される。なお「どんどろ」とは「土井殿」の転化で、お弓、おつるの悲しい場面はあまりにもポピュラーである。

荻江節鐘の岬

宝暦三年（一七五三）に初世中村富十郎によって初演された長唄「京鹿子娘道成寺」は、数ある「道成寺もの」の決定版となった。

それがふたたび上方へ逆輸入されて「九州釣鐘岬」の題で再演されたが、そのときの唄が地歌に「鐘ヶ岬」として残った。それをさらに幕末のころ、荻江に取り入れたもの。したがって歌詞は、それらと共通であるが、曲の趣はやはり江戸風になっている。

新内節 明鳥夢泡雪（明鳥・雪責）

明和六年（一七六九）七月三日、伊之助三芳野の心中事件がおきた。男は浅草の御用商人の養子で二十一歳、女は吉原鳶屋の遊女で二十四歳と伝える。二人は前の年からなじみを重ね、金につまり、男は勘当、女は他の客を断るといふ始末で借金はいふばかり、二人は廓を抜け出して心中となった。この事件にヒントを得て、鶴賀若狭掾が新内に作曲したのは、安永元年（一七七二）のことと伝える。ニュース性の強いかわものだったが、曲がよく出来ていたので、今日まで語り伝えられ「蘭蝶」とともに新内節の代表曲となった。全曲を通して演奏すると一時間半以上もかかるので、下の「雪責」を一部省略して演奏する。

春日屋時次郎は山名屋の浦里となじみを重ね、そのための借金で首がまわらない。時次郎は、あがる資格もないのに浦里の部屋へ忍んでいたが、遣手に見つかり、若い衆に表へ叩き出されてしまふ。残された浦里は禿のみどりとともに庭の古木に縛りつけられ、折りから降り来る雪の中で、亭主に責められる。そのあとの浦里の嘆きから。

隣りの二階からきこえる三下りのめりやすへ昨日の花は……」が効果をあげる。このあたりは宮園節の「夕ぎり」の影響かも知れない。時次郎が屋根伝いに助けに来て、逃げ出したと思っただのが夢であつたというのは、題名にもあらわれている。

常磐津 積恋雪関扉（関の扉）下

天明四年（一七八四）十一月、江戸桐座の顔見世狂言「重重人重小町桜」（じゅうにひとえ・こまちざくら）の大切浄瑠璃として初演された。作者は劇神仙こと宝田寿菜。作曲者は当時の豊後節の作曲の名人鳥羽屋里長と推定されている。

逢坂山の関を守る良岑宗貞の下で、天下を望む大伴黒主が関守関兵衛となつて忍んでいる。宗貞とかねて恋仲だった小町姫が尋ねて来て、宗貞と再会、互いに悲しい恋の思い出に泣く。そして小町姫は関守関兵衛を怪しいと見て、味方に知らせに行く。

以上が上の巻で、今日は時間の都合で下の巻のみの演奏。関兵衛が酔って出て宗貞にからみ、追



払うので、宗貞は心を残して奥へ入る。残った関兵衛が、天下調伏の護摩木にしようとして、雪中に花咲く墨染桜を伐ろうとする。と、宗貞の弟の安貞と契った墨染桜の精が、傾城墨染となってあらわれる。そして関兵衛を相手に廓話のあと、関兵衛の本性を見現わし、立廻りになるという場面。古い顔見世物の常として、内容は荒唐無稽なものであるが、それだけに大胆に筋を展開したおらかさは、天明気分そのままである。まだ自然と人間の生活が密接だった時代が感じられ、名曲としてたびたび上演され、今日に及んでいる。常磐津の作品中でも、もつとも大曲といわれるばかりでなく、浄瑠璃所作事の中でも一つの完成度を示す作で、筋の展開、スケールの大きさ、音楽的な構成など、あらゆる面で最高傑作といわれている。

### 尺八鹿の遠音

琴古流本曲三十六曲のうち、修禪を旨として特に重んじられる「古伝三曲（真虚霊・霧海籠鈴慕・虚空鈴慕）」に対し、宗教性の少ない芸術的な曲として、この「鹿の遠音」は「鶴の巢籠」とともによく知られています。

紅葉の頃、雌鹿を慕って啼く雄鹿のなき声を描写したものとわれ、秋の深山の情景を彷彿させる趣があります。古来から二管による「掛け合い」で演奏されることが多いのですが、必ずしも雌雄二匹とは限らず、複数の雄鹿が雌鹿を慕ってこもこも啼くありさまという解釈もあり、三管またはそれ以上で演奏されることもあります。

冒頭の旋律は、深山の静けさを思わせるこの曲独特のもので、そのあとにきかれる「ムライキ」奏法は、息を強く吹きこんで出すもので、三曲合奏ではきかれぬものです。ふたたびムライキがきかれたのち、短いフレーズの掛け合いがありますが、ここが雌雄の鹿が呼び合う情景をあらわしているといわれるところだ。

初めにテンポを遅くとり、次第に速くして二管がからみ合うように進み、再度テンポを落します。そして冒頭の雰囲気にもどるかのようになり、曲は静かに閉じて行きます。

### 長唄京鹿子娘道成寺

この曲については、今さら書く必要もないほど、よく知られている。能の「道成寺」を基本にして、初演された宝暦三年（一七五三）までの「道成寺もの」の集大成曲である。作曲者として初世杵屋弥三郎の名をあげる人が多いが、むしろ編曲者といった方がいいかもしれない。

とにかくすぐれた作品で、いつきいても楽しいし、何度きいてもあきない。近世三味線音楽の代表曲として、これほど広く知られた曲はない。長唄の代表曲であると同時に、広い意味での日本音楽の代表曲といっていいたいだろう。

## 第二部

### 義太夫新版歌祭文

安永九年（一七九〇）九月、大阪竹本座で初演された。近松半二作。お染久松の心中を主題にした「袱の白絞」「染模様妹背門松」から登場人物、ストーリー、有名な文句までそのまま借りて、お染久松ものの決定版となっている。なかでも野崎村の段はとくに有名で、歌舞伎でもよく上演されている。

油屋の丁稚久松は、集金した金を偽金とすりかえられ、野崎村の養父久作のもとへ送される。ここには重病で目の見えなくなった久作の後妻と、その連れ子のお光があり、久作は久松とお光を夫婦にしようと思っていた。その久松が帰ってきたので、お光は嬉しくてしかたがない。そこへ久松とは恋仲のお染があとを追って訪ねてくる。二人が心中もしかねないと知った久作は、意見をして別れることを納得させ、祝言にしようとお光を呼ぶ。が、お光は事情を悟り、尼姿になって出てくる。油屋の後家も外で様子を聞いていて、お光に感謝し、世間の目もあるので、久松は駕籠で、お染母子は船に乗り、大阪へ帰って行く。

### 三曲松風

初代中能島校松声一と三代山木校太賀一の作曲。

宇和島藩伊達家の姫君が、島原藩松平家に嫁し、江戸で五か月を過ごしたが、夫が参勤交代で帰国病

没してしまった。それをあわれんだ里の両親が娘を慰めるために、立派な箏を新調し、十三の琴柱にはそれぞれ別の蒔絵をし、別の名前をつけた。それにちなんだ歌詞を作って、出入りの山木校校に作曲させたものという。別に、その箏を「松風」という説もあり、琴柱には本文中にある松風の和歌「松風の調べ添えたるつま琴は千代のためしにひくべかりしを」を書いたともいう。また嫁入りのときに持参したのが「松風」の箏ともいい、作詞はその姫君であるともいう。

箏に寄せて故人を偲ぶというのが主題であるが、変化に富み、箏の弾きかたや楽器の部分名称を巧みに取り入れ、終りはめでたい句でむすんである。

### 一中節熊野文の段

謡曲「熊野」によったものだが、同名の山田流箏曲の影響が強いと思われる。安政四年（一八五七）の成立らしい。作曲は多分初世宇治紫文齋の妻倭文であろう。熊野御前が宗盛の供をして清水へ花見に出かける。そこへ故郷の池田から、母が病気という使いがくるが、宗盛は許してくれない。熊野はその手紙を読み、（題名の由来）さらに花の散るさまを一首の和歌に詠んで舞う。あまりのあわれさに、宗盛は、熊野が故郷へ帰ることを許す。満開の桜のなかに、人の世の無常を描いたこの曲は、しみじみと訴えかけてくるものがある。一中節宇治派の代表曲。

新内節 若木 仇名草 (蘭蝶)

新内節の代表曲。初世鶴賀若狭掾の作曲で、新内節といえはこの中のタドキへ縁でこそあれ未かけで……」が、その代名詞になるほどよく知られている。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、禰屋の此糸となじみを重ね、女房のお宮が身を売った金まで入れあげてしまう。お宮は客となって此糸に逢い、蘭蝶との夫婦のなりたちを語り、蘭蝶と縁を切ってくれ、別れてくれと頼む。此糸はお宮の真実に向たれ、縁を切ることを約束する。その様子を隣の部屋できいていた蘭蝶は、此糸の本心は死ぬ覚悟であろうと察し、結局、お宮の願いも空しく、二人は心中してしまふ。

全曲を演奏すると一時間以上もかかる大曲なので、その中でもっともよく知られているお宮のクドキへ縁でこそあれ……」を中心に演奏する。

なお、へああ嬉しやと思つたは……」以下の三味線が、いわゆる新内流しの手に使われている。あわせてそのあたりもきいていただきたい。

常磐津 忍夜恋曲者 (将門)

天保七年(一八三六)七月、江戸市村座初演。桜田寿助作詞、四代目岸沢式佐作曲。

大宅太郎光圀が源頼信の命を受け、平親王将門の一味余類を詮議のため、相馬の古御所に忍んでいる。と、そこへ将門の娘の滝夜叉姫が島原の傾城如月となってあらわれ、色仕掛けで光圀を味方に引

き入れようとする。しかし将門討死のようすを聞くうちに、正体をあらわし、妖術を使って戦うという節。

幕末の作品であるが、全体に古風な味があり、それでいて変化があり、まことによくできた作品といえよう。なかでも「嵯峨や御室の」クドキは有名で、常磐津の代名詞になっているほどである。この正月の歌舞伎座で上演されたのは、記憶に新しい。

尺八 鶴の巢籠

普化尺八曲のなかではもっとも有名な曲で、宗教的ではなく、芸術的な曲として「鹿の遠音」と双壁をなしている。

作曲年代はわからないが、古くから諸地方の虚無僧寺に伝えられてきた。内容は、親鶴が子を育てて別れるまでの喜びや悲しみを中心にしたもので、タバ音という鶴の擬音が吹かれるのが特色。今日の都山流の演奏は、初代中尾都山が工夫を加えたもの。二管で親子の鶴の掛け合い演奏。琴古流では「巢籠鈴慕」という。

清元忍逢春雪解(三千歳)

河竹黙阿弥作詞、二世清元梅吉作曲。明治十四年三月、東京新富座上演の世話狂言「天衣紛上野初花」(くもにまごううえのはつはな)の第六幕「大口寮座敷の場」に出した狂言浄るり。悪事がばれて、高飛びしようとする片岡直次郎(直侍)が、入谷の寮にいる三千歳に最後の別れを惜しんで忍んでくる。その色模様に使ったもの。

長唄勸進帳

この曲は「越後獅子」などとともに、長唄の代表曲としてよく知られている。元来、舞踊劇の地(伴奏)として作られたので、歌詞だけをきいていたのでは、意の通じないところがある。それにもかかわらずもてはやされているのは、劇としての「勸進帳」が、歌舞伎として知られていること、また音楽としても、多くの他流の特色をとり入れながらもすっかり長唄化され、演奏しやすいことも原因としてあげられよう。いずれにしても、長唄の美点を集大成したといってもいいほどの名曲で、よく演奏される。

作者は三世並木五瓶、作曲は四世杵屋六三郎(のちの六翁)が、一世一代としてその技倆をふるったもので、作曲に三ヶ月を費したと伝えられている。それも、はじめは全曲二上り調の説教節じみた節付だったので、のちに改作して、現今の本調子となったと伝えられている。

なお、初演のときの「勸進帳」は、いわゆる松羽目物の先駆作品であり、また、演奏にあたっては立別れの形式をはじめたことも、特色として知られている。

御礼 邦楽連合会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

おかげさまでこの演奏会も、二十回目を迎えることができました。これも皆様のおかげと厚く御礼を申し上げます。また、このように邦楽が一緒に集まり、まとめて御鑑賞いただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしよう、出演者も一生懸命でございます。これから続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますよう、重ねてお願い申し上げます。

来年はまた会場が変更いたします。三月一日(金)に国立劇場小劇場で開催する予定です。番組がきまり次第にご案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日お聞き下さいましたご感想やご意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のためにご指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。